

9月14日（水）

おはようございます。

今日は愛国心の話をしようと思います。愛国心については日本では戦前のトラウマを抱えており、愛国心のことをきちんと教えられないがゆえに、偏狭な愛国心や誤った愛国心、いわゆるヘイトスピーチのような愛国心になったり、最員の引き倒しのような愛国心になったりして、結果として自分の国にマイナスになるような事態が起きていると私は思います。

今年私がインドに行ったとき、一人のチベット人に会いました。彼のことをいつかは必ず諸君にお話しようと思っていましたのでいろいろ考えて今日お話することにしました。その人は、日本に6年間いて、日本語がよくできます。またアメリカに2年ほど行っていたということで、チベット人の中では、なぜかよく評価されておらず、評判のあまりよくない人でした。

彼は、ニューデリーにあるチベット亡命政府の事務所で働いていましたが、日本語が上手ということもあり、理事長先生がお願いをして私たちのツアーのサポートに来てもらっていました。名前をアリアさんといいます。私が帰りにバスの中で「あなたくらい日本語はもちろん英語もできるのなら、はっきり言ってどこでも仕事は得られるでしょう。どうしてアメリカで働かないのですか。」と聞いてみたのです。奥さんも子どもさんもアメリカにいるということを知っていたからです。

すると、アリアさんが次のような話をしてくれました。「実は僕は、ロスアンジェルスで一所懸命勉強をしてそこの公務員の試験に受かったのです。そこでもし僕が、公務員を続けていたら亡命チベット人であっても、いきなり家のローンも組むことができるくらい待遇がよかったです。しかし僕にはずっと一つの疑問がありました。このままアメリカで働いていけば自分の家も持つことができ、生活に困ることはないだろうし、やがて孫に囲まれて自分の家で最期のときを迎えることができるだろう。だけれども、その一番最期のときに僕は大きな後悔をするのではないかということをも毎晩毎晩考えていました。

なぜかというと、自分はどうやってロスアンジェルスの公務員試験を受かるほどの教養を身につけることができたけれども、これは誰のお陰かということ、ダライラマ法王とチベット人のお陰なのです。しかしチベットは今民族存亡の危機の状態にあり、そういうときに自分一人だけアメリカで幸せに過ごしていいのだろうか。それは違うのではないかと思ったからです。それで奥さんに、僕は

インドへ帰ろうと思うと話しました。そうしたら、奥さんは、『あなたの毎晩の様子を見ていたら、私も感じることはありませんか』と。あなたがそういうことをいつか言い出すのではないかと、実はひやひやしていたのです』と言いました。『あなたが公務員試験に合格して私は安心していただけども、あなたの様子を見ていたらそういうことを言い出すのではないかと。彼女は僕に『人生は一回だけだから、あなたが思うようにされたらどうですか』と言ってくれました。

子どもたちは大反対をしました。『お父さんは何を言っているのですか。給料もいいじゃありませんか』と。それで、彼は二人の子どもに言いました。『チベット人というのは今民族の危機におかれている。このまま中国に同化されてチベット人というのは亡くなってしまうかもしれないのだ。将来おまえたちの子どもが学校に行ったときに、この時代のことが教科書に載るだろう。そういう民族が滅んでしまうような大変なときに、お父さんはどういう行動を取ったのかということをお前たちにはわかってほしい。この時に僕は、自分を育ててくれて、チャンスを与えてくれたチベット人と法王様に対して奉仕することが自分の人生の正しいあり方だと思うのだ。だからお前たちの子どもたちが学校に行ったときに、お前たちのおじいさんはどういう決断をしたのか、どういう行動を取ったのかということを知ってほしいのだ。』と。そうしたら、子どもたちも分かってくれました。

それですぐ翌日、職場の上司に、『すみません。私はもうインドに帰ります』と言った。すると当然上司もびっくりして、『君はなにを言っているのか。君は亡命チベット人だろう。亡命チベット人で、公務員採用試験に合格することは滅多にないことなのだよ。このチャンスをみすみす逃すのか。』と言われました。それで、僕は家族に言ったことと同じことを話しました。『民族が亡くなってしまうかもしれない危機のときに、自分を育ててくれたチベット人のために自分のできることをしたいのです。後悔しないように生きたいのです。だから分かってほしいのです』と。上司は黙って聞いていて、『部下が一年以内にこういう形で辞めてしまうことは、私にとってはマイナスだ。しかし、君の志は正しいと思う。上司には私が上手に話すから、君はその志のままに生きなさい。私は応援するよ。』と言ってくれました。

そういうわけで私はインドに帰ってきました。給料はとても大きな差がありました。一年間の給料全部で、アメリカに一回行って帰ってくるだけの旅費にしかありませんでした。二回行くのだった

ら、家族から仕送りしてもらわなければなりませんでした。けれども自分の心には何のやましきも不幸感もありませんでした。」というようなことをアリアさんは話してくれました。

それぞれの民族にそれぞれの愛国心があるのです。いつも言っていますが、対等の目線で同じように認めてあげて同じ目線で話し合うことが大切なのです。相手が気に入らないのでヘイトスピーチをするような愛国心は、結果として自分の国に対してマイナスな効果をもたらしてしまいます。

アリアさんのお話を聞いて私は大変感動しました。アメリカに渡り帰ってきた人間ということで、今周りのひとにはよくない風にいるいろ言われていますが、彼は、そんなことは関係ないと思っているのです。自分で納得して、貧しくても、自分の生涯をこの地ですごそうとしているのです。人生は一回限りだから、自分が死ぬときに後悔をしたくないということなのです。こういう愛国心があるのです。

他国や他の民族に対して、偏見や差別的な目線で見るとはではなく対等な目線で見ると相手を受け、もし問題があったら対等な目線で話し合うということが、グローバル化の時代に必要な愛国心だと私は思います。この話は諸君にも、愛国心を考える上での大きなヒントになるのではないかと思いますので今日お話をしました。

今朝の話はこれで終わります。

学校長